発表論文 35

肢体不自由のある視覚障害者の歩行訓練の1事例

武田 貴子・三浦 久美

(北九州市立介護実習・普及センター)

要旨:

重複して障害がある場合、視覚障害の不自由さに加え、違ったニーズが出てくる。本研究では、肢体 不自由を合わせ有するケースについての歩行訓練を実施し、手引き歩行、白杖歩行、その他の可能性に ついて本人のニーズである単独歩行の可能性を検討した1事例を報告する。

キーワード:重複障害、歩行訓練、手引き歩行、白杖歩行、盲導犬歩行、多職種連携

1. はじめに

北九州市保健福祉レポート(2018)によると、 北九州市の人口955,967人(平成30年3月31日現在)に対し、3,340人が視覚障害によって 身体障害者手帳の交付を受けており、市内の身体障害者49,983人のおよそ7%を占めている。 その中には、様々な手帳を重複して受給されている方もいる。本研究は、肢体不自由を合わせ有するケースについての歩行訓練についての1事例を報告する。

2. 症例

2.1. 訓練受講者プロィール

受講者:50代、女性

眼疾患:右)、小眼球・ぶどう膜欠損、白内障

左)白内障

既往歴: 先天性のサリドマイド薬害

障害等級等:

視覚障害 1級(右 0.01 左 0)

肢体不自由1級(両上肢欠損)

障害支援区分:区分5

家族構成:妹夫婦、両親と同居

2.2. 経緯

先天の弱視で白杖を持つことなく生活してき たが、白内障が進行し、転倒する事が増え、駅 のホームから転落し危険を感じた。今後も一人 で歩きたいので白杖やその代わりになるものは ないかと相談に来所。訓練事業を利用申請する。

3. 訓練の経過

3.1. 面接時のニーズ

一人でふらっと外出するのが好きなので、これからも一人で歩きたい。

両親が高齢のため、一人暮らしをしたい。

3.2. 訓練目標

歩行訓練の目標を下記のように設定した。

- (1) 手引き歩行 (ガイド歩行): 腕や肩をもって もらう事ができないので、音声以外で支援 者の動きをどうやって伝えるか。
- (2) 白杖歩行: タッチテクニック等、基本操作ができないので、どのように工夫し、白杖歩行するか。
- (3) 白杖以外の単独歩行の可能性:白杖以外の方法で、単独歩行が出来ないか。

3.3. 訓練内容

訓練受講:新規(訓練経験なし)

歩行訓練回数:11回 (全生活訓練回数:17回)

3.3.1. 手引き歩行 (ガイド歩行): 両上肢 に代わる方法として、訓練受講者の腰に色々な 色や太さの違う紐を結んだ方法を検討した(図1)。

連絡先:takeda@kati.gr.jp 受稿:2019/12/18

その中で、訓練受講者より「ターバンを使ってみるとおしゃれで種類も多いし楽しめる」と提案があった(図2)。検討したところ、ターバンはおしゃれであるという事だけではなく、①輸状になっており、手引き者が持ちやすい、②手軽に購入できる、③ベルトにも簡単に通せる、という利点があった。

また、毎日の洋服の着脱時に家族が付け外す 必要があったが、現在使っているリュックの肩 ベルトにターバンを結びつける事で、付け外し の手間を省く事ができた。

さらに、毎回交通系のカードをリュックから 取り出し、手にもって移動していたが、これも 肩ベルトの上部に取り付ける事で、バスでの支 払いもスムーズになった(図3)。







図1 腰に紐を結ぶ方法の検討(色や太さの検討)







図2 紐やターバンを使った方法の検討

交通系カード も毎回取けたいにはいる ではいたものではいいにはいる がいたがいにはいる がいる では、ので では、ので できる。



カラフルで おしゃれン たくさん たて集める 楽しさも。

図3 リュックにターバンを結ぶ方法の検討

手引きの4つの条件(芝田, 2007a)に沿って、これまでに検討した①腰に紐を結ぶ、②ベルトを持つ、③紐をベルトやリュックに結ぶ、④ターバンをベルトやリュックに結ぶという方法を評価した(表1)。

表 1 手引きの 4 つの条件による方法の検討

方法	安全	能率	見た目	やりやすさ (本人)	やりやすさ (支援者)
腰に紐を結ぶ	0	×	×	\triangle	\triangle
ベルトを持つ	0	0	×	\triangle	×
紐をベルトや リュックに結ぶ	0	Δ	0	0	0
ターバンをベルト やリュックに結ぶ	0	0	0	0	0

3.3.2. 白杖歩行:

(1) アセスメント

- ①歩行訓練士と作業療法士の評価
- ・義手は、小さい頃のトラウマがある。
- ・手は少し使えるが、力が弱く持久力がない。
- ・体への負担から軽量でなければならない。
- ・白杖の保持が困難で何らかの固定が必要 手指の機能評価等については、作業療法士 にも参加してもらった。

②本人の要望

- ・自分で操作したい(取り付け・取り外し等)
- ・収縮機能がほしい(バスの乗降等)

(2) 白杖の選択と工夫

単独歩行を目的とした白杖は、軽量で収縮 機能のあるものとし、差し棒をイメージした。 杖先にローラーチップを付けることで、路面 から離れないようにするための動きを楽に出 来るようにした。白杖の作製については、義 肢装具士にイメージを伝え、作製を依頼した。

固定は作業療法士にも参加してもらい、ゴムバンドを使用し、背中からたすきがけにし、脇の下に白杖が固定できるよう工夫してもらった。

白杖の収縮の機能は、時間がかかるが足で 調整する事ができた。

屋内ではある程度機能したが、屋外では路面の影響を受けやすくほぼ機能しなかった(図4)。

そこで、まずは白杖の機能の中のシンボルの機能(芝田,2007b)に焦点を当てて、長時間保持が可能となるように訓練受講者でも持ちやすいクロックハンドルのタイプを選択し、疲れた際、手を離せばリュックの肩紐で受けとめられるように工夫した(図5)。







図 4 白杖の工夫







図 5 シンボルの機能を生かした白杖の使用

(3) 白杖以外の単独歩行の可能性

訓練受講者は、白杖での単独歩行をイメージしていたが、盲導犬歩行の可能性も検討した。日本盲導犬協会より協力の申し出があり、ハーネスの着脱等の工夫を進めていく予定である。日本盲導犬協会のハーネスは、白杖のグリップと同じタイプを使用しており、白杖の使用も含めて検討中である(図 6)。





図 6 日本盲導犬協会使用のハーネス

4. 結果

(1) 手引き歩行

訓練受講者と相談しながら、手引きの4つの 条件を基に検討する事で、「ターバンをベルトや リュックに結ぶ」方法を導き出す事が出来た。

(2) 白杖歩行

単独歩行に対応できる白杖は、今後検討していく必要があるが、シンボルの機能については、「クロックハンドルのタイプ」を選択する事で、手が疲れた際に、離せばリュックで受け止められるよう工夫し、長時間の保持が可能になった。

(3) 白杖以外の単独歩行の可能性

白杖のグリップと同じタイプのハーネスを使用している日本盲導犬協会と連携し、今後盲導 犬歩行の可能性を検討する事が出来た。

5. 考察

視覚障害以外にも不自由さを抱えている方については、その障害種別の専門職と連携を取る事が有効であったと思われる。本ケースについては、肢体不自由について、作業療法士や義肢装具士と連携する事で歩行訓練士では困難な評価や用具についての知識を共有する事が出来た。また、家族(妹)、相談員の方とも情報共有する事で、今後の課題や家族の不安等も共有し、最終的な本人のニーズである一人暮らしへのアプローチにも繋げる事が出来たと思われる。

6. 今後の課題

今後も引き続き、白杖による単独歩行、盲導 犬歩行の可能性について検討していく。

文献

- 1) 北九州市(2018) 北九州市保健福祉レポート. 272-273.
- 芝田裕一(2007a) 視覚障害児・者の理解と支援. 北大路書房, 97-98.
- 3) 芝田裕一(2007b) 視覚障害児・者の理解 と支援. 北大路書房, 47-48.